



切り絵『酉』
比企善彦作



茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所

茨木市元町4-3

072(622)2346

[http://www.](http://www.ibarakijinja.or.jp/)

[ibarakijinja.or.jp/](http://www.ibarakijinja.or.jp/)

「酉」のはなし

平成二十九年は「酉年」。「酉」は本来「酒」を意味する文字ですが、原形文字が水鳥の姿に見えることから十二支の「とり」を意味する文字に当てられ、鳥の中でも身近で人の役に立つことから代表して「鶏」が選ばれたと言われます。

鶏は鳥の中でも声に優れ、また夜明けを告げる神秘性を持った生き物として古代より珍重されてきました。今日、東の空がほのぼのと明るくなる頃を「暁（あかつき）」と言いますが、かつては一番鶏が鳴く頃を「あかとき」と言い、二番鶏・三番鶏が鳴く頃をまだ暗くても「暁」と言いました。まだ暗い中であっても鶏鳴が夜と朝の境だったのです。

暗い夜から明るい朝を告げる鶏鳴は神話や祭祀・伝承などにも登場します。古事記に天照大神が天岩屋戸にお隠れになられた時、世が暗闇に包まれ乱れました。神々は天照大神に岩戸からお出ましたいただくための様々な神事を行いました。その中に多数の鶏（常世長鳴鶏）を集めて鳴かせたのです。

以後、伊勢神宮で執り行われる二十年毎の遷宮では、大神が新宮に遷られる際、神職が鶏鳴を三声発することになっています。

古代から人々にとって鶏の鳴き声は朝、明るい世を告げる声でもあり、逆にそれは暗い夜、乱れた世の終わりを告げる声でもあったのです。

シリーズ神道 「拍手」

神社にお詣りの際、ご神前で皆様はどのような作法で参拝されるでしょうか。

一般に神社での拝礼作法は「二礼二拍手一礼」にて参拝します。まず、深い「お辞儀」を二回、次に「拍手」を二回打ちます。その後、もう一度深い「お辞儀」を一回します。

この拝礼と拍手を打つ作法が文章に表れた初見は、今から約一七〇〇年前(二八〇年〜二九七年の間)の中国の歴史書「魏志倭人伝」に「見大人所敬但搏手以當脆拜」の様に記されています。また、我が国では「古事記(七一二)」に、雄略天皇が葛城山へ鹿狩りに行かれた時、天皇一行と全く同じ恰好の一行が向かいの尾根を歩いているのを見附けられ、雄略天皇が名を問うと「吾は

悪事も一言、善事も一言、言い離つ神。葛城の一言主の大神なり」とお答えになられ、雄略天皇は恐れ入り、弓や矢のほか、官吏たちの着ている衣服を脱がせて一言主大神に献上されました。この時に一言主大神は天照大御神の子孫であられる天皇から献上を受けた事をお喜びになり、「御礼の手打ち(拍手)」をされたとの記述があります。

このように古代日本人は、神・人を問わず貴いものに対し敬意の表現として手を打っていたのです。現在の「二礼二拍手一礼」の作法は、明治以降に各社の拝礼作法を統一したもので、それ以前の拝礼作法は各地において様々でありました。

しかし、より強い敬意・感謝の心を表すとして、今日でも出雲大社・宇佐神宮・弥彦神社等では「四拍手」と称し四回、さらに最も尊い天照大御神を祀る、伊勢神宮では「八度拝・八開手」といって八回の拝礼と拍手を打

ちます。

その他に神道式での葬儀では悲しみを表すため、尊い御霊に對して音を出さない拍手「偲手・忍手」、祭りの後の直会では神様から戴いた神酒を受ける時に一回打つ「礼手」が有ります。

奉賛会だより 神社参拝バスツアー

去る十一月二十四日、恒例の奉賛会バスツアーを実施し、七十五名のご参加をいただきました。今回は姫路市に鎮座する射楯兵主神社に正式参拝をいたしました。播磨国総社と地元の人々に親しまれ、古代より歴代の国司をはじめ戦国時代末には黒田如水(官兵衛)、豊臣秀吉、そして歴代の姫路城主が崇敬、護持してきた古社です。

「総社」とはその地域に奉祀する神々を一つに合わせ祀った社のことで、平安時代、国司が任

地に赴く際に最初に参拝する「一宮」と並んで称されます。正式参拝のあと、播磨国総社が誕生した歴史的経緯などについて講話を受けました。



その後「平成の修理」を終え白鷺の天守閣がよみがえった国宝姫路城を見学。爽やかな青空に白く華麗に映えた大天守は、紅葉の深まる木々の彩りと共に多くの人々を魅了していました。



この日、関東では十一月としては五十四年ぶりに積雪に見舞われ真冬並の寒さとなったようですが、播州は心地よい晴天に恵まれ今回も充実した旅行となりました。



黒井の清水大茶会

去る、十月二十二日(土)、二十三日(日)、恒例の「黒井の清水大茶会」が開催され、二日間で約三千人で賑わいました。

当社境内の西北隅にある井

戸「黒井の清水」から湧き出る水を、太閤秀吉が茶の湯に愛用したことに因んでこの茶会は始まりました。当初は茨木市商工会議所が主催していましたが、平成十八年に発足した茨木市観光協会に主催が移り今年で十年目を迎えました。

すっかり秋の風物詩として定着した「黒井の清水大茶会」。ご神前に茶を奉る奉茶式齋行の後、茨木市茶華道連盟のご奉仕により野点が行われ、訪れた人々は振る舞われた茶菓をたのしみ秀吉の栄華に思いをはせます。



また、地元名産の銘菓や地酒が販売されるほか、昔の市内の風景や町並み、自然豊かな山河の写真を展示するコーナーなどが設けられました。

二十三日にはNHKの大河ドラマ「真田丸」で千利休役を演じられた桂文枝さんが、本番さながら利休に扮装されて登場し、「黒井の清水」の井戸などを見て廻られ、本殿前で行われたトークショーではドラマ撮影時のお話をユーモアを交えて語られ楽しい一瞬となりました。



扱穂祭齋行



稲穂がこがね色に波打つ実りの秋、今年も十月二十六日に扱穂祭を齋行しました。御垣内で育てた神様に捧げる稲を刈り取る神事ですが、扱穂(ぬいぼ)とは大昔まだ鋭利な鎌がない時代に稲穂を一本ずつ抜き取っていたころの名残と考えられています。

このお祭りで刈り取られた稲は、十一月二十三日に神前にお供えをして新穀の豊穰を感謝する新嘗祭を齋行しました。



稲は天照大御神様がお授け下

今年の作況は全国的に「平年並み」のようですが、当社で栽培しました「イセヒカリ」も元気に育ちました。この「イセヒカリ」というお米は平成の御代の始めに伊勢の神宮で誕生した新種の特別な稲で、当初、神宮では門外不出としていました。しかし全国からの強い要望を受け特別に主要神社や篤農家に種籾の下賜を認めました。当社でもこの有り難い稲を神宮よりお頒ち戴き、御垣内で大切に栽培しています。時代とともに食生活も変化し、現代人の「米離れ」が叫ばれて久しい今日ですが、米の消費量の低下はそのまま農業人口の減少にも繋がります。

された大切な「いのちの糧」です。国の基である農業をこれ以上衰退させぬよう様々な取り組みを期待したいものです。

茨木神社雅楽会

去る十月十五日、当雅楽会は

市民総合センターホールにおいて開催された「茨木花いっぱいチャリティーコンサート」に出演しました。第十二回目となる今回は昨年に続き雅楽「蘭陵王」の舞と演奏を行いました。

「蘭陵王」は中国・唐の時代の王が戦場の兵士の士気を鼓舞するため、金色の恐ろしい面をつけて勝利した説話を舞にしたものでした。軽快な雅楽曲に合わせて絢爛豪華な装束で舞台を飛び回る勇壮な舞です。これまでには「豊栄舞」や「浦安舞」などの神楽も演奏してきました。翌週の「黒井清水大茶会」にも出演し、心地よい秋空の下、優雅な雅楽の音色の中、野点の

一時を楽しんでいただきました。雅楽演奏はもとより舞は有名神社以外ではなかなか観ることができないものです。

これからも日本の伝統文化を雅楽の良さを多くの方々知っていただくために、日々研鑽に励み、雅楽の魅力を発信してゆきたいと思っています。



これからの主な神事

◆越年祭

十二月三十一日

◆歳旦祭

一月一日

午前十時

◆十日戎祭

一月九日～十一日

◆御火焚（とんど）

祈禱水奉焼祭

一月十五日

◆節分祭

鎮魂星祭

二月三日

◆紀元祭

二月十一日

◆初午祭

二月十二日

◆人形奉焼祭

四月八日

◆春祭（祈年祭）

奉賛会厄除安全祈願祭

四月十八日

◆大祓

茅の輪くぐり神事

六月三十日

